優秀賞
心のバリアフリー
埼玉県立戸田翔陽高等学校　１年
軍司　啓仁

私の母は生まれつき両足股関節に不具合があったそうです。それでも、中学生時代はテニス部に所属し、冬にはスノボーを楽しみ、社会人の頃はヒールで駅の階段を駆け上がり、それが“普通”という生活を送っていたそうです。しかし、医師からは妊娠や出産をした場合、車いす生活になるだろうから諦めた方がいいと言われていたそうですが、母は私たち双子を出産しました。産後、激痛で歩くことが困難になってしまったそうです。でも母は自分が望んだ出産を喜び、できなくなってしまったことを嘆くより、今の自分ができることを精一杯前向きにやろうと思ったそうです。杖があれば自分の足で歩けることは嬉しいと言っています。杖のある生活が母にとって普通になって気づいたことがあったそうです。それは周りから“若いのに杖なんて可哀想”といった言葉を聞くようになったこと。母は杖があれば歩けることは自分にとっては嬉しいことなのに、周りからは自分は可哀想に見えてしまうことが一番悲しかったそうです。また、“足が悪い障害者”と区別されてしまう言葉。身体の事で悪いなど、障害という言葉は何だか抵抗があり嫌なイメージがあるからと、母はあえて不具合という言葉を使います。

私が小学生の頃、クラスメイトに母の歩き方が変だと心無い言葉を言われ、私の双子の兄は暴力まで受けるようになり不登校になってしまった事がありました。その時、いつも笑顔の母が、
「足の悪いママでごめんね。」
と泣いて謝ってきました。その姿を見て私は、足が不自由なことは悪い事でも謝るようなことでも決してないと思いました。母が杖を使うことは私にとっても普通の事で、何より大好きな母に変わりはないからです。言葉によっては悪気なく、むしろ相手を気遣ったつもりでも受け取る側を傷つけてしまう事もある。言葉は薬にもなれば暴力という危険な毒にもなってしまうのだと思います。言葉とは心の結晶だと聞いたことがあります。相手を笑顔にできる、少しでも綺麗な結晶になる言葉選びをしたいと思いました。

そして、中学生の時に市内で開催されたプレゼンテーション大会に私は埼玉県のエスカレーター条例というテーマで出場しました。埼玉県ではエスカレーターに乗ったら歩かずに止まるという条例ができました。左右どちらに乗っても構わないというのは私の母のように左手で杖を使用している場合でも杖を持ち変えたりせずに済むのです。たぶん母の事がなければ気にならなかった条例だったと思います。しかし、条例が施行されても、右側に立ち止まっていると迷惑がられ、邪魔だという言動を受けたことで条例がまだ浸透されていないことに気づき、プレゼンの題材にすることで少しでも多くの人に認識してもらえたらと思いました。プレゼンを通して、自分の普通を基準にしてしまうと自分と少しでも違うところのある人を“変”という偏見の目で見てしまう。それこそがおかしな偏見だと思いました。自分と違うからと一歩下がって距離を空けるのではなく、自分と違う部分を尊重して受け入れたり、足りないところは補ったり分け合ったり、支え合えるような一歩踏み出して距離を縮め横に並べば、世界はもっと優しさに溢れた、豊かなものになるはずだと考えました。例えば視力が悪くて不便だから眼鏡やコンタクトをつけるのは何も思わないの　になぜ足が

不自由だからと杖や車いすを使用することには偏見が生じてしまうのか。世の中には自分と同じ人はいないし、不具合な部分も含めて、その人の個性だと思いまます。例えるなら、ゲームでいうアイテムです。アイテムを装備することで、できることが増えればそれは可哀想な事ではなく、むしろ幸せな事だと思います。自分と違うからと偏見を持つのではなく、自分の正解が相手の正解とは限らない事を理解して相手の立場になって物事を考え、言葉選びにも気を配り、コミュニケーションを取っていけば、それは心のバリアフリーに繋がるのではないかと考えます。私には気にもならない小さな段差も車いすでは大きな障害になると知りました。私にとって大したことではなくても相手にとっては重要な事だったりします。場所だけじゃなく、心もバリアフリーの世の中になるように、まず相手の立場になって考えられたら偏見も障害という壁はなくなり謝罪の言葉より感謝の言葉が溢れ、誰もが笑顔になれるのではないかと思います。そうなるように、少しでも近づけるように、今日できる私の精一杯を積み重ねていきます。まずは身近な大好きな母が毎日笑顔で過ごせるように頑張ります。